

東日本大震災を思い返して－応急仮設住宅の建設－

天間 智哉（仙台市水道局給水部計画課主幹兼統合浄水場準備室長）（当時所属：都市整備局営繕課）

市役所7Fの事務室でコーヒーを入れようとしていたら揺れ始めた。「これは大きいな」と感じながら近くにあったキャビネットを抑えたが、直ぐに立ってられないくらい揺れが強くなり「キャビネットを抑えている場合ではないかも…でも今更離れられない…」と思ったことを思い出す。

一旦外に避難した後事務室に戻ったが停電のため近くのテレビは映らず、しばらくしてラジオで津波があったことを知る。さらに夜には仙台市の沿岸で200人の遺体があるとの情報がラジオで流れた。現実とは思えなかった。数日後、復電した自宅のテレビで初めて見た津波の映像は衝撃的だった。

地震直後に家族の安否はメールで確認できたが、津波到着後には石巻市に住んでいる妹と連絡がつかなくなった。前回の地震の時もちゃんと家族で避難したと話していたから今回も大丈夫だろうと自分に言い聞かせつつも不安な気持ちを抱えながら業務にあたった。震災5日後、仕事が終わった後に一旦家に帰り、安否確認のため一人車で石巻市に向かった。途中から大粒の雪が降り街灯も消えているため視界が悪い。深夜で先行車も後続車も対向車もない中を慎重に進む。石巻の妹夫婦の住居近くの避難所で確認すると夕方に自宅に戻ったと教えてくれた。はやる気持ちを抑えながら妹の自宅に向かい、みんなの無事を確認した後は仙台にとんぼ返り。帰りの車の中で震災以降張り詰めていた緊張が急速に解けていくのを感じた。翌日の朝は寝坊した。

家では停電が続いたため冷凍庫にあるものを順に食べていった。退役し物置に仕舞ってあった石油ストーブを引っ張り出して調理。親の世帯と私の世帯で冷蔵庫が二つあったことも幸いし何とか食いつなぐことができた。

私は応急仮設住宅の建設を担当することとなり、まずは建設場所選定のための調査を行った。区画整理実施中でライフラインが整備済みの大規模な更地がまず建設候補地となった。その後は被災者の生活環境を考慮し津波浸水区域に近い公園が建設候補地となっていった。調査では各ライフラインの復旧状況や供給の可否を確認する必要があり、水道局とも密に連絡を取って進めた。宮城県や区役所等の関連部署と打合せを重ねながら現地調査で沿岸部にも行った。変わり果てた景色にショックで言葉が出てこなかった。土埃が舞う中で応援に駆けつけてくれた警視庁や大阪府警の方々が行方不明者を捜索していた。

応急仮設住宅の建設は宮城県が主導して行われており、いち早く阪神大震災の経験がある兵庫県

の応援が入っていた。しかし県沿岸部全域で一斉に応急仮設住宅の建設が進められ、石巻市より北の地域では造成工事が必要な地区も多くあり人手が足りない状況だった。宮城県から仙台市の分については仙台市で工事の監督、検査等を行ってほしいと依頼があり私は引き続きその業務を担当した。それでも宮城県では人手が足りないらしく、土日に仙台市内で検査をした後に他都市に出向き検査を手伝ったりもした。

震災から1か月程度経った頃、ふと道路脇の桜並木に目が留まった。「こんな時でも桜は咲くのだな」と思い、時の流れや地震・津波も含む自然との中で暮らす人間について改めて考えさせられた。

6月中旬には市内で合計18団地1,505戸の応急仮設住宅が完成した。その後も雨水対策工事、玄関前の改良、集会所へのエアコン設置、庇設置、寒さ対策工事など冬まで団地と役所を往復する日々が続いた。要望や苦情も多く、夜に応急仮設住宅に呼び出されたこともあった。きちんと向き合い話をすると、たいいていの方は理解してくれたし、その後はすごく協力してくれた。多くの方がどこにぶつければいいのか分からない悲しみや怒りや不満を抱えていたのだと思う。昼間から酔っぱらっている住人に絡まれ、強引に一人暮らしの部屋に引き込まれたこともあった。酒臭い1DKの住居の壁に並んだ真新しい5つの遺影を見た時は何とも言えない気持ちになり話す声が震えた。

所属する営繕課では市有建築物の応急修繕・復旧・建替え等で多忙を極めており、応急仮設住宅についてはスピード重視という点から担当の現場判断が認められていた。当時、応急仮設住宅建設にはもう一人の担当がおり、日々二人で各々の現場を駆け回りながら、会うたびに「それは課長まで報告しておこう」、「それだったら別の団地ではこうした」などと情報共有していた。今考えると一担当が判断してよかったのかと思うことも多々ある。ただあの時はぎりぎりの中で必死に業務をこなしていた。当時の記憶には辛いことも多くあまり思い出したくないが、この同僚ももうこの世にはいなく、当事者として当時を語り合う機会がこの先ないのは少し寂しい気もする。